

くべっ川



2017(平成29)年11月1日 第245号 標津町教育委員会 ☎0153-82-2900



「サミット宣言」を読み上げる参加者

町内の小中高校生が学校生活からの学びを披露！

第4回元気に頑張る標津の子サミットが、9月2日、町生涯学習センターで開かれ、町内の小中高校生の5校25人、9発表が「特色ある学校生活からの学びや活動」をテーマに発表し、住民や教育関係者約80人が日頃の活動に熱心に聞き入りました。

本サミットは、「地域の子どもは地域で育てる」気運を高めることを目的に隔年で実施しており、当日は、各校児童・生徒が、学校や地域での活動

を写真やグラフなどを使い分かりやすく発表しました。

発表後には、来場者からの感想のほか、金澤町長からの励ましの言葉や根室教育局教育支援課西川課長から全体の総評をいただき、最後には発表者全員によるサミット宣言を行い、地域との交流や、人とのつながりを大切にする学校づくりに取り組むことを宣言しました。

第4回 元気に頑張る 標津の子サミット ～「特色ある学校生活からの学びや活動」～

町教育委員会は、町全体で子どもを育む運動をより一層広げ、推進したいと考えています。未来に向けて夢や希望を持ち、明るく・楽しく・元気よく標津っ子が頑張る姿を発信するとともに、地域で学校を支援する気運を高めることを目的に本サミットを開催するものです。

本サミットので発表した児童生徒の発表内容をご紹介します（氏名敬称略）

※司会進行は、標津高校3年野口あゆみさんと2年田中智基さんに担当していただきました。
なお、本紙の掲載内容は紙面構成上、一部を割愛させていただきますので予めご了承ください。

「ふるさと教育サケ学習」

《標津小学校五年生》

・藤本 美優・小野 由奈
・太田珠瑠那

標津小学校では6年間をとおして、標津の特産であるサケについて学習しています。「ふるさと教育 サケ学習」について発表します。

まず、2年生では、冬にサケの卵をサーモン科学館の方に持ってきて頂き、学校の水槽でサケのふ化の様子と成長を見ることが出来ます。2種類の水温の違いで、ふ化のタイミングや成長の仕方を見ることが出来ます。ふ化を見た3年生にインタビューしてみると「中でぐるぐる回って出てきたのがすごかった」と答えてくれました。ふ化した稚魚は、進級した3年生が放流に行きます。ふ化をした稚魚を放流すると、直ぐいなくなってしまうようです。ふ化の様子から稚魚の成長を近くで見ることが出来ます。

4年生の時には、サーモン科学館探検隊として、サケや色々な魚の観察をしてポスターを作りました。5年生では、7月に金山の滝にサクラマスの遡上見学に行ってきました。滝の流れに負けず、勢いよく滝を上

るサクラマスを見ることが出来ました。9月のサケ漁の時期には、漁業体験で漁港に行き、漁師の方の話を聞いたり、加工センターの見学をします。10月には、忠類川で、11月は、サーモン科学館へ行き、産卵行動を学習します。昨年学習した6年生に活動の様子と感想を聞いてみると、忠類川では、サケの死骸がたくさんありびつくりしたそうです。サーモン科学館の魚道水槽では、何分も待つてようやく産卵が見られた時は感動したそうです。



サケ学習を発表する標津小

最後に6年生では、サケの人工受精体験をしています。その他に、私たちは年に一度のいくら給食も大好きです。地域の方のご厚意でいくら給食を今年も楽しみにしています。このように、標津小学校では、2

年生から6年生まで標津の特産であるサケの体験学習を行っています。たくさんの方の地域の方に支えられて、学習することができていると、あらためて感じました。5年生では、一番多くサケ学習ができるので、残りの学習も楽しみたいと思います。

「未来への贈り物」

「ふるさとを守る町民のチカラ」

《川北小学校六年生》

・菲澤 理子・長谷川莉都
・工藤 愛香

私達、川北小学校では、総合的な学習の時間に自分達の住んでいる「地域や町について」調べふるさと学習に取り組んでいます。

3年生は川北の地域について、4年生は自分達が誇る川北自慢を各チームで調べて、壁新聞にまとめ発表会を、5年生では自分達の住んでいる標津の学習範囲を広げ、町長さんや多くの町民の方々に取材をさせて頂き、今、標津にある課題について考える学習を行っています。昨年度、私達は標津町の課題を「未来への贈り物新聞」にまとめ、北海道新聞主催の道新グランプリで、最高賞のまなぶん大賞を頂きました。私達

が考えた、標津町の課題を発表します。

私達が住む標津町。人口約5300人のこの小さな町にも、今、少子高齢化、人口減少という時代の波が押し寄せています。私達の町の課題、大きく分けて3つあります。町の課題に対し、標津町長の金澤瑛さんに、どう思うかという取り組みをしているのかインタビューさせて頂きました。

まず、1つ目の課題である「子育てしやすいまちづくり」は、誰もが安心して病院や保育園、幼稚園を利用できるようにしたいという思いから、18歳までの医療費無料、0歳児から2歳児までの保育料負担軽減、3歳から6歳までの保育・教育料完全無料化を実現させました。また、標津高校存続も、町内外から生徒を募集し、高校の生徒は標津の宝として町が全面的に支援をすることで、入学者数の減少に歯止めをかけることができました。

次に、2つ目の課題である「若い人たちが標津から離れてしまつ」とは、住宅取得助成金の支給、土地の無料化、高齢者福祉、ふるさとの未来を担うリーダーづくりをします。土地の無料化では「5年住んだら土地代無料」として全国各地から移住者を公募し、多くの方々

民として移り住み、新たな団地として美郷団地が生まれました。移住された方は「標津町は、人と人との助け合い精神がすごく強く、たくさんの人と仲良くなれて快適ですし、大自然の景色に感動し、食べ物も美味しく、充実した日々を送っています」と語ってくれました。



標津の町民力を発表する川北小

最後に、3つ目の課題である「私たちの暮らしを支える産業」では、新しい農業経営者づくり、起業支援補助、標津ブランドづくりに力を入れていきます。金澤町長は、「5300人の町民の暮らしが少しでも良くなるように、酪農業や水産業をしっかりと築き、地震や津波にも強い安心、安全な町づくりをする」と、子どもが未来に夢を持てるような標津を目指している」と力強い

思いを教えてくださいました。この取材で私達は、役場が人口減少に対し、どのような対策をとっているのか理解することができました。

町の他の人々は、どのような取り組みをしているか、まずは商工会としての取り組みを、会長の篠田静男さんに聞いてみました。商工会では、高齢の方々や身体の不自由な方々のために、どこでもカウモン号という移動販売車の運行をして、各自宅まで車を寄せて、どこでも誰でも買える物ができます。年に4回の青空市場を開催し、特産品や地元の人が手作りの味覚などを出店し、買い物を楽しんでもらう活動もしています。

次に、主な産業である農業や漁業の取り組みは、若手後継者の育成、しべつ牛乳や新鮮な魚介類を使った標津ブランド開発、年に1回、町民へホタテ・バター・鮭の無料配布、地元学校給食へのいくらの無料提供を行っています。特に、鮭の無料配布では、大きな鮭が各家庭に1本ドーンと届くので、毎年町民の皆さんは楽しみにしています。また、地域で困っていることがあれば、すぐに話を聞いて助けてくれる頼れる存在が民生委員さんです。私達川北っ子の強い味方は児童館の館長新村さん、「どうしたの、今日はどうだった」と声をかけてくれ、行事でも大

活躍のスーパーヒーロー的な存在です。地域の方々がこうして私達を見守ってくれているからこそ、私達は、安心・安全に暮らせる実感がありました。

こうした人口減少に対する取り組みの成果として、町民がどの様に感じているのか、新しく町民となった川北小学校の先生方に取材をしました。二人のお子さんをもち川北に家を新築された瀬川先生は「保育料や幼稚園の無料化はすごいと思います。とても助かっています」と、子ども園にお子さん一人いる川田先生は「医療費の無料は素晴らしい。家計に助かります」として、一昨年、川北地区に家を新築された佐藤先生は「任んたら無料という言葉、たくさんの方が移住をしてくれました。私も住宅を新築し、町の助成制度を利用しました。住宅新築には大変なお金が必要になるので、本当に助かりました」と答えてくれました。「標津町民で良かった、標津が好き」と思えるような、町民の暮らしを応援する取り組みをどんどん進めている標津町。これから私達も、町民一人ひとりが、この標津町のために何ができるのか、しっかりと考えて行くべきであり、それこそが、未来を担う子供たちへの贈り物につながると感じました。

三「水キラリ」を通して 私たちができること

《標津中学校一年生》

・工藤 涼音・椎久乃里香

私 たち1年生は、標津町を代表するお祭り「水キラリ」について土曜授業を利用して実施運営委員長の吉田智さんをお招きして、水キラリにかける想いや成り立ちについて学びました。

水キラリは、当初酪農や漁業それぞれに存在していたお祭りを、一つにまとめたものがお祭りです。水キラリという名前は、町民から案をいただき決まったものです。水キラリは、標津に住む全ての人の想いが込められたお祭りであり、百年続くお祭りにするために、毎年改善を加えながら実施しています。

土曜授業を受けての私たちの感想は、水キラリが出来る前はいくつもお祭りがあったことに驚きました。2日目の夜には、道路を封鎖してまで、曳山巡行を行うことがすごいと思いましたが、さすが標津を代表するお祭りだなと感じました。

そして私たちは、実際に水キラリに参加してみました。ただ、参加するのではなく、土曜授業で学んだこ

とを思い出しながら曳山巡行に参加してみると今まで気づかなかったことが見えてきました。踊っている人も、見ている人も笑顔になつていて、気持ちがよかったです。老若男女問わず、幅広い年齢層が参加していて、水キラリの盛り上がりを感じました。



水キラリを発表する標津中

このお祭が、百年続くお祭にするためにどうすればいいか考えました。もつと色々な人に知ってもらうためにポスターやチラシを広範囲に配ってみること。標津に住む若い世代の人たちが率先して実施運営委員会の人たちと協力し、運営していくことで、次の世代に受け継がれると思います。このような取り組みを実際に行い、標津を代表するお祭り「水キラリ」が百年続くようにしていきたいと思いました。

四. 地域の防災について 〜講演から学んだこと

《川北中学校一年生》

・木庭 実優・塩沢 紗英

私

私たちは、川北中学校の土曜授業について、地域の方からの講話や地域への取材活動とおし、ふるさと川北の良さを再発見する、街づくりの新たな視点を考えてまとめ、壁新聞で地域に発信する、という2つの目的のもと、年間3回の計画で行います。1回目の学習は7月8日にふるさと川北の地質について有識者からの講話に基づき、地域に出かけて壁新聞作りに向けた取材活動を行いました。2回目は9月30日で、壁新聞の制作状況を全学年で交流し、工夫している点を共有したり、アドバイスをしたりする内容です。3回目は12月9日で、地域の方を講師に招き、ふるさと川北の講話を聞き、自分の将来の設計図を考える内容を予定しています。

今回は、1回目の土曜授業の内容についてです。1時間目に「ふるさと川北の地質について、有識者からの講話を聞き、2・3時間目には講話に基づき、地域に出て壁新聞作りに向けた取材活動を行いました。



町の防災を発表する川北中

1時間目は、役場住民生活課の和田直人さんにお越しいただき「火山について学んでみよう」と題し、講話していただきました。火山とは何か、カルデラとは何か、大昔から続く噴火の歴史、道内の活火山など、身近な火山を取り上げながら、わかりやすく説明していただきました。9万年前に熊本県阿蘇山の巨大噴火のほか、2万8千年前に鹿児島県の始良カルデラ、8千年前の北海道摩周、7千3百年前 鹿児島県の鬼界カルデラなどの巨大噴火が示されています。校舎裏の沢には、1739年、今から278年前に噴火した樽前山の火山灰が残っていることも教わり、全校生徒で校舎裏に行き、草の生い茂った地面を掘り起こしてみると、すぐに火山灰の層を見つかる

五. 北方交流事業に参加して

《標津中学校二年生》

・小野瀬 柚

テレビでしか見たことがなかった安倍総理大臣に会った時、一番最初に思ったことが「安倍さんってこんなに背が高いんだ」でした。人生の中で総理大臣に会う機会があるなんて、今まで考えたことがなかったし、自分が総理大臣に会っているところを想像したこともありませんでした。

私なぜ総理大臣に会えたかという、北方少年交流事業に参加したからです。7月26日から31日までの6日間、根室管内に住む中学生6人と共に東京に行き、内閣総理大臣、

文部科学大臣、北方担当大臣、外務副大臣への表敬訪問、関東甲信越ブロックの青少年交流をしました。

私は少しでも早く北方領土問題を解決できるように、元島民三世として、私の思い・祖母の思いを安倍総理大臣や関係大臣の方々に直接伝えられたので、この事業に参加しました。



北方交流事業の発表する標津中

総理大臣はじめ各関係大臣への表敬訪問では、自分の北方領土に対する思いや考えを発言することができ、総理官邸特別応接室のほか、各大臣の部屋でも実施され貴重な機会を得ることができました。表敬訪問では「私の祖母は択捉島の紗那に住んでいました。祖母の思い出は、夏は川で泳ぎ、冬はスキーをしたことを楽しそうに話していました。祖母は、北方領土に自由に行き来できるようになることを強く望んでいます。祖母の思いが風化しないうちに

叶えてあげたいです」と伝えました。安倍総理大臣からは「少しでもこの四島の問題、平和条約問題が前進するよう全力を尽くしていきたい」との言葉を頂きました。この事業に参加しなかった理由である「私の思いそして、祖母の思いを安倍総理に直接伝える」ということができず、たのすごく嬉しかったです。

関東甲信越ブロックの青少年との交流では、グループで活発的に意見交換を行いました。道東のイメージを聞くと、鮭とイクラという答えが返ってきました。私は、様々な人たちの思いを聞くことができ嬉しく思い、特に北方領土をあまり身近に感じることのできない関東甲信越の中学生でも、北方領土に興味を持ってくれているんだと感じました。私たちのグループでは『近づこう北方領土 早期返還 島民の考え』という標語を作りました。

今回の事業の参加をとおして、標津中学校のみんなに、もっと北方領土について知ってもらいたいので、まずは私自身が何でも答えられるように北方領土の知識を増やしていきたいです。みんなに北方領土について知ってもらうことが、私の祖母の願いである「北方領土に自由に行き来できるようになる」ということに近づくと第一歩になると思います。

六・壁新聞の取材について

《川北中学校二年生》

石井 柊羽・小野 愛佳
山崎 咲輝

私たちは、壁新聞作りの取材活動の詳細について発表します。取材は、全校生徒が川北の事業所や農家、個人の家庭などに一斉に出かけ、様々な話を聞いてきました。



壁新聞の取材を発表する川北中

取材に行く際は、事前に質問を考えていきます。取材をとおして分かるか本やインターネットからも情報を得ることもできますが、直接伺えるお話や情報はとても貴重です。普段生活している地域のよさを改めて

発見することもできます。また、地域の方々とふれあいをとおして交流を深められたことも嬉しかったです。この学習活動は地域の皆様のご協力が必要不可欠です。取材に協力してくださった方々に感謝したいです。

壁新聞は聞いた話を決められた字数にまとめ、読む人に興味関心をもってもらおう内容にしなければなりません。今回の取材活動を通してあらためて地域の良さ、地域の方々の温かさを感じることができました。

七・ふるさと観光

《標津中学校三年生》

徳橋 泰一・若松 愛美

丸和信和建設 知床標津マルワ食品の代表取締役の田村正範さんに標津中学校に来てもらい、「鮭ぶし」をとおしての町おこしについて話をしてもらいました。

鮭ぶしができるまでの秘話などを話してもらい、そば好きの人たちが、お酒を呑みながら「美味しい蕎麦が食べたい、じゃあどうするか、だしを作る」と考え、みんななどんなだしを作るか考え出来たのが、

鮭ぶしだったと聞ききました。何気ない言葉や考えが大きなことにつながることを学びました。また、今まで見向きもされなかった産卵後のブナ鮭を使用し、美味しい鮭ぶしを作っているなど、物の見方・考え方を变えることで新しい世界が広がることを学びました。



鮭ぶしを発表する標津中

何よりも、標津の活性化を考え、町が元気になるためにはどうしたら良いのかと考え、実際に行動に移している田村さんはすごいと思いましたし、標津のために人々が活動している心意気を感じ、標津の大人が頑張っていることを知りました。そして自分自身も、もっと標津のことを知りたいと思いましたし、将来、標津で働く事になった時にみんなの役に立ちたいと思いました。

今回の田村さんの講話を聞いて、今やっている勉強がとても大事であ

ることや努力の大切さ、人との出会いを大切に、仲間を大切にすること、自分が「こうしたい、あーなりたいたい」と思った事に努力すること、プラスαで自分の考えを盛り込むことが大切だということを学びました。

八. 壁新聞作りについて

《川北中学校三年》

・野口 昂・桐島 瑠菜
・小部 孝文

私 たち3年生は「総合的な学習」
として取り組んでいる、壁新聞
を作っていく様子をお伝えします。

川北中学校では、全校でかべ新聞制作に取り組み、全員が学習として次のような目標を意識しています。

「地元を知る」
「私たちの育った川北地区、標津町を記事にすることで、その良さを再確認し、抱えている課題を考えていきます。」
「自分をみつめる」
「記事にまとめていく過程で、自分の意見をまとめ、新たな視点を身につけていきます。」
「情報をまとめ、発信する」
「たくさん集めた情報を、読む人に分かりやすくを心がけながらまとめる力を付けていきます。」



壁新聞作りの工程を発表する川北中

ガイドランスからはじめて、35時間で完成させます。それぞれの学年が3つの班に別れ、各班が1枚の新聞を作っていきます。今年のスタートは6月9日、完成締切りは10月5日です。

完成した作品は、学校祭で展示し、先生方が審査をして、校内審査が行われます。各学年の最優秀賞は毎年行われる、北海道新聞の壁新聞コンクールに出展しています。このコンクールは今年度で終了となるので、出展は今年が最後になります。

継続して取り組んできたポイントをまとめた壁新聞B.O.O.Kを参考にしながら制作を進めますが、これをしっかり読めば、制作の流れや注意する点が全て分かるようになっていきます。制作作業の導入部分は、学年が進むごとに経験したことが増える

ので、手際よくスムーズに進んでいきます。記事の内容を作り上げていく過程では、アンケートや取材活動で、保護者の皆さんや地域の皆さんにたくさん協力していただきます。文章作りが苦手な人も、何度もやり直ししながら完成を目指します。

紙面づくりが一番経験したことが生かされる場面です。独りよがりにならず、見る人を引き付けることを意識して、アイデアを出し合います。基本のレイアウトは、3年生が参考にしていく過去の作品と、製作途中の紙面を持ってきました。今年の3年生の作業目標は、過去の失敗も踏まえて、全班期限内に完成させて、質の高いものにするということです。10月5日の完成を目指し、2学期も協力して頑張っていきます。

九. ボランティア部の活動状況報告

《標津高校ボランティア部》

・渡會 一真・田中 智星
・若菜 翼・大隅 望夢
・小山内綾音・齊須 愛花

「**こ**」んには、ボランティア部で

私達は現在14人で活動しており、

笑顔、情熱、誇りがモットーです。主な活動は校内清掃、チャリティー販売、校外の活動では特別養護老人ホームはまなす苑や、児童館でのお手伝い、地域行事のお手伝いなどを行っています。学校祭ではメイド喫茶のほか、着ぐるみやカフェエプロンを身に付けてチャリティー販売などをして、売り上げは北九州の水害への募金として寄付しました。はまなす苑では主に食事の配膳や掃除のお手伝いを行っていますし、児童館には週に一度行き、子ども達とドッチボールや大根抜きなどで楽しんだり、児童館祭りへの参加、オホーツクマラソンや縄文まつり、水キラリのお手伝いもしています。



活動を発表する標津高ボランティア部

ボランティア部では、紫外線によ

って固まるレジンの元の液を型に流し込んだあと、ラメ等を入れて固めるアクセサリーやミサンガを作っています。町内の工房の方々のおかげで、トンボ玉も作れます。今、紹介した物の売上金は東日本大震災や北九州で水害の義援金として寄付しています。その他、災害支援釧路ネットワーク、災害支援ボランティアの活動に参加して、東日本大震災の被災地、福島県南相馬市を訪れ、震災後放置されていた竹林の伐採を行いました。

防災活動の一環として、釧路東高校と合同で防災交流会を行い、HUGという避難所ゲームや実践発表をとおして交流を深めました。冬の爆弾低気圧で標津川が危険水域に達し、避難所として標津高校が使われるという想定で、避難所を年齢や職業、健康状態などで各部屋に振り分け、要望や対応など内容を話し合いました。この活動をとおして、人と人との関わり大切さや地域に貢献する尊さを学ぶことができました。

私達がボランティア部として活動できるのは、地域の人々が必要としてくださっているからだと思っています。そのため今後も地域の方々への感謝の気持ちと共に活動していきたいと思えます。

金澤町長からの励ましの言葉

今年で4回とも欠かさず出席をさせていただいています。そして、今回も期待どおり素晴らしい発表でありました。

発表者の皆さんは、学校の中に留まることなく、一歩地域や町の中に出ていくと様々な活動、経験、体験をされて、しかも積極的な姿がひしひしと伝わってきました。会場のみならずも同じ思いだったのではないかと思います。その活動に多くの地域のみなさんが関わっており、町民力、地域力で子どもをサポート



トする。家庭と地域、そして学校の3つの力がひとつになって初めて成しえることだと思えます。今日も改めてその目的を深く、感じているところです。

町づくりに関しては、子育て支援を行うためあらゆる政策、仕事を総動員してやっていますと考えています。ただその中で一番気になっているのが、18歳の壁である高校を出たけれど、22歳の壁である大学を出たけれど、ぜひ生まれ育った標津に帰っていきたい、戻りたい。しかし、仕事がないことに頭を悩ましています。今の社会は就職の場、雇用の場を作っていくことが大きな課題です。今日の、こうした取り組みが必ずや子どもたちの将来の生きる力に繋がっていくと思います。ご参加の皆さんには、子どもたち、そして学校、地域の取り組みに惜しみない理解とお力添えを心からお願いいたします。

根室教育局 西川教育支援課長からの総評（要旨）



①プレゼンテーション能力の高さ

～図や写真、データを示しながら、自分の考えを伝えることの高さを強く感じた。どの発表も分かり易く伝える工夫がされ、写真や図を用いる、インタビュー形式、作成した実物を見せてイメージが持てるようなそんな工夫があった。これから外国の人と交流していく機会や仕事していく中で、このプレゼンテーション能力の高さというのは、とても大切で大きな力になる。

②疑問を見つける鋭い眼を持っている

～サケの成長や標津の将来、川北の知識、地域の祭りなどの話があった。町おこしやボランティア活動など、様々な体験経験を通して、たくさんの疑問や課題を見つけている。これからの日本や世界中の人々が一緒に解決すべき環境問題や国と国との争いの問題、北方領土問題、少子高齢化問題も解決していく上でとても大切になる。

③感謝の気持ちを持っている

～発表の中に地域の方々に支えられて学習できていることを感じたこと、地域の方々が見守って下さっているから安心・安全に暮らせること、地域の人との交流を深められ、地域の人の温かさを感じたこと。感謝の気持ちを持てる人は人間として、大きく成長できる可能性を持っている人。

④未来を見据えている

～町の産業や人々の暮らしの未来、領土問題といった日本の未来を見つめ、自分にできることやしなければならないことを考えている。自分自身の将来についての夢や目標、なりたい大人の姿のイメージも持っている。

⑤人や出来事に感動できる心を持っている

～産卵の場面を見た感動や地域行事で活躍されている方、地球のスケールの大きさへの実感など、ものの見方や考え方で新しい世界が広がることを気づいていた。ボランティア活動で出会った人々の力強さへの気づきも。身の回りにいる人や出来事に感動する素直さと、それを感じ取る心の働きを持つことが大事なこと。お互いを幸せにできる力が育っていくと、この標津にはもっと笑顔が溢れていくように思っている。

第4回元気に頑張る標津の子サミット宣言

わたしたちは、海・山・川・大平原と恵まれた自然環境にある「ふるさと標津」の学びフィールドを活かし、多くの町民の皆さんの温かいご支援をいただき、さまざまな活動・体験を通して学んできました。常に感謝の気持ちをもって、お互いに笑顔であいさつを交わすとともに、地域の方々と交流を深め、人と人とのつながりを大切にする町に、大人の皆さんとともに次のことに取り組んでいきます。

1. 学校での学びから「ふるさと標津」との学びにつなげた体験活動をこれからも進めます
1. 早寝・早起き、朝ご飯など基本的な生活習慣を身につけます
1. スマホやネット・ゲームなどソーシャルメディアは節度を持った利用をします
1. いじめや差別は絶対に許さず、無くします

2017年9月2日 第4回元気に頑張る標津の子サミット

代表 標津高校3年 渡會 一真



来場者からの感想



司会の田中さん、野口さん



発表中の様子